

『経営に役立つヒント』

令和七年七月一日

第二百六十六号

かねて尊敬する社長、滋賀県の酒造業「松の司」松瀬酒造株式会社、代表取締役松瀬忠幸氏が、令和六年秋の叙勲において、「黄綬褒章」受章の榮に浴されました。

その祝賀会が六月二十一日に、地元で開催され、私も関係者の一人として同席させて頂きました。

滋賀県には三十歳の酒造業があり、品質において常に全国の上位を維持する銘酒の産地ですが案外知名度が低いのが残念です。

松瀬社長の素晴らしいのは、竜王町という地元の酒米を使い、量よりも品質にこだわり、酒好きの心を捕まえて放さない本格的な日本酒作りの王道を歩いておられることです。

酒米の最適米山田錦の育成は手間がかかり、減農薬で栽培する農家の苦勞は並大抵ではありません。

若い農家の後継ぎを育てるために、安定した価格で買い取る事を約束し、酒米作りに誇りを持って協力してくれる人を育てるといふ、松瀬社長の気の遠くなるような心意気に、話を聴く側の心まで熱くなります。

酒米を高く買うから、当然に酒の価格も高くなる。しかし、それでないと、農家はもちろん、小売店も、酒蔵も永続は出来ない。その酒造りの「物語」を伺えば、成る程そうか、この社長にはプリンシプルがある、大義があると益々ファンになります。

碩学森信三先生は「田を耕すにも、単に一日の仕事として耕すか、一家を憂いて耕すかはたまた一国を念頭において耕すかによつて、そこに描かれる波紋にも小大無量の差を生ずべし。しかも、その現れたる処は畢竟、みな田を耕すに過ぎず」と、教えて下さっています。当に、志の高さ、純粋さが、一口の酒の味に出ていると、常々感じているので、この受賞を、我が事のように嬉しく喜んでいきます。黄綬褒章の受賞者の多くは、当該団体の役職や、長い公務に対して行われるそうですが、松瀬社長は、酒造業界の振興発展と刷新に尽力した功績によるものです。

「田を耕すに過ぎず」農業・漁業はもとより、土建業も然り、小売業も然り、あまねく産業は、毎日毎日の同じことの繰り返しです。その同じことの繰り返しの中に、何を発見し、何に気付くかの差でしょう。

これが本当の地域振興であり、最澄伝教大師の「一隅を照らす、これ国宝なり」の実践に外なりません。松瀬社長から、改めて、中小企業の大変さと同時に、喜びや魅力、可能性を示唆されました。

各社の社長、共に、我社を立派にして、素晴らしい日本を創って参りましょう。

今月のポイント

一国を念頭に仕事に

全力投球して参りましょう。

